



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	M.S. ヴォロンツォフ研究の視角と展望（2・完）：カフカス全権総督(1845-1854)の統治政策を中心に
Author(s)	花田, 智之; Hanada, Tomoyuki
Description	研究ノート
Citation	北大法学論集, 57(3), 278[259]-260[277]
Issue Date	2006-09-29
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/14815">https://hdl.handle.net/2115/14815</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	hogakuronshu57-3-10.pdf



## M.S. ヴォロンツォフ研究の視角と展望（2・完）

—カフカス全権総督(1845-1854)の統治政策を中心に—

花 田 智 之

<はじめに> M.S. ヴォロンツォフ研究の視角

<第一章> M.S. ヴォロンツォフの略歴

【第一節】 生誕からイギリス時代まで（1782-1800）

【第二節】 カフカス陸軍中尉からナポレオン戦争まで（1801-1815）

【第三節】 パリ占領軍ロシア最高司令官時代（1815-1819）

【第四節】 新ロシア総督時代（1823-1844）

【第五節】 カフカス全権総督時代（1845-1854）

（一）カフカスでの「内憂外患」

（二）ザカフカスでの「新統治」

（三）カフカス戦争での「新戦略」

【第六節】 総督引退と晩年（1854-1856）

【小 括】 M.S. ヴォロンツォフ研究の意義（以上、前号まで）

<第二章> M.S. ヴォロンツォフ先行研究の動向（本号）

【第一節】 ロシア帝国時代の先行研究について

【第二節】 ソ連時代の先行研究について

【第三節】 現代の先行研究について

<おわりに> M.S. ヴォロンツォフ研究の展望（本号）

## <第二章> M.S. ヴォロンツォフ先行研究の動向

本章では M.S. ヴォロンツォフに対する研究史の流れを追うことで、彼がロシア史の中でどのように描かれてきたか、とりわけ彼のカフカス全権総督およびカフカス軍最高司令官としての歴史的な位置づけについて、最近の先行研究とともに見て行く。

M.S. ヴォロンツォフ研究は大きく三つの時代に区分することができる。第一期はロシア帝国時代、第二期はソ連時代、第三期は現代となる。本論文ではこれら三つの時代それぞれの研究史の特徴を明らかにして、本研究がロシア・ソ連歴史学のなかで見せた歴史解釈の変遷を踏まえつつ、その現代的な意義を考えたいと思う。なお本論文の性質上、紹介する史料や文献のうち、ザカフカス統治やカフカス戦争に関連するものを中心に紹介する。

### 【第一節】 ロシア帝国時代の先行研究について

M.S. ヴォロンツォフ研究の学術的基盤となる一次史料やカフカス統治政策に関するアルヒーフ（古文書）のほとんどは、ロシア帝国時代の19世紀後半に編纂されたものである。

まず重要なのは、ロシア人官吏 P.I. パルテネフによって編纂された『ヴォロンツォフ公アルヒーフ<sup>1</sup>』である。これはヴォロンツォフ家全体の手記や往復書簡などを再編集したもので、このうち主に35巻から40巻までが M.S. ヴォロンツォフに関するものである。具体的には彼の長年の親友だった A.F. ベンケンドルフとの往復書簡（35巻）、同じく彼の長年の親友でカフカス長官を務めた A.P. エルモロフとの往復書簡（36巻）、1803年ザカフカス赴任から新ロシア総督（1833年）までの半生を描いた M.S. ヴォロンツォフによる自伝（37巻）、内務大臣 P.D. キセリョフや教育大臣 S.S. ウヴァロフとの往復書簡（38巻）、いわゆる「ヴォロンツォフ・スクール」の代表格で、アレクサンドル 2 世時代の「大改革」で農奴解放に貢献した A.I. リョブシンとの往復書簡（39巻）、K.V. ネッセルローデ外務大臣やニコライ 1 世との往復書簡（40巻）が収録されている。

---

<sup>1</sup> АКВ. Кн.1-40. Москва, 1870-1895.

これらはロシア国立古文書アルヒーフに所蔵されている「ヴォロンツォフ家アルヒーフ<sup>2)</sup>」やカフカス全権総督時代の彼自身の日記<sup>3)</sup>などと併せて、彼の幅広い交友関係や政治姿勢を理解するうえで貴重な一次史料である。

次に、M.S. ヴォロンツォフのカフカス統治に関する一次史料として『カフカス古文獻編纂委員会法令集<sup>4)</sup>』（以下『カフカス法令集』と略記）がある。これは1864年にカフカス総督ニコライ大公が創設したカフカス古文獻編纂委員会（A.P. ヴェルジュ委員長）が作成したもので、1801年グルジア併合から1862年バリヤチンスキー総督退任までの、カフカス全体での半世紀にわたる諸政策や軍事戦略がまとめられている。そして『カフカス法令集』は、初代カフカス長官クノリングから長官ごとに全12巻で構成されていて、このうち第10巻がM.S. ヴォロンツォフに相当する。これはザカフカスでの内政やカフカス戦争での「新戦略」を理解するためだけではなく、M.S. ヴォロンツォフ全権総督とチェルヌイシヨフ陸軍大臣（兼カフカス委員会委員長）との往復書簡を通して、ペテルブルグとカフカスの相互関係を把握するのにも必要不可欠な史料である。またこれに関連して、ザカフカスでの統治政策を年代ごとに研究したB.N. イワネンコ<sup>5)</sup>やS.S. エサージェ<sup>6)</sup>の著書も、ロシア帝国時代の研究書として非常に優れている。

そしてM.S. ヴォロンツォフを個人史という視点で分析したものでは、彼の死後2年をして新ロシア時代から秘書を勤めていたM.P. シェルビーニンが『陸軍元帥 M.S. ヴォロンツォフ公伝』を著している<sup>7)</sup>。これはM.S. ヴォロンツォフの生涯を、カフカス陸軍中尉、ナポレオン戦争の英雄、バリ最高司令官、新ロシア総督、カフカス全権総督という華々しい行政軍事キャリアとともに描

<sup>2)</sup> Российский Государственный Архив Дневных Актов. (далее. РГАДА). Фонд. 1261. Воронцовых. Оп.1. е.х. 1952-2598.

<sup>3)</sup> Выписки из дневника.

<sup>4)</sup> АКАК. Тифлис, 1865-1890.

<sup>5)</sup> Иваненко В.Н. *Гражданское управление Закавказьем от присоединения Грузии до наместничества Великого Князя Михаила Николаева*. Тифлис, 1901.

<sup>6)</sup> Эсадзе С.С. Историческая записка.

<sup>7)</sup> Щербинин М.П. Биография генерал-фельдмаршала., Воспоминания М.П. Щербинина. // Русский Архив. 1876. Кн.3. С. 285-313.

いたもので、彼の偉業を賞賛する言わば英雄伝のような色彩が強い。次に同じく彼の長年の配下で、オデッサ・リツェイで教師を務めた N.N. ムルザケヴィッチが、新ロシア総督時代の内政的功績を評価して、特に彼自身も携わった教育政策や新聞政策を分析している<sup>8</sup>。また二十世紀初頭に S.L. アバリアニが、M.S. ヴォロンツォフと農奴問題についての研究書を著しており<sup>9</sup>、いずれも重要な二次文献である。

これ以外にも、彼のバリ最高司令官時代の軍隊規律についての研究<sup>10</sup>や、ベッサラビア総督時代の統計資料を編纂したものなど<sup>11</sup>、彼の個々の統治政策に注目した研究も進められた。また同時代に活躍した A.M. ドンドウコフ＝コルサコフ、A.L. ジッセルマン、F.F. ヴィーゲル、A.M. コルフなどの手記や回想録の中にも M.S. ヴォロンツォフに関する記述を見ることができ<sup>12</sup>、これらは二次史料としての学術的意義を有している。

更に、カフカス戦争研究としてカフカス軍最高司令官 M.S. ヴォロンツォフの軍事戦略を取り扱った史料や研究も見られる。特に1876年から1912年まで編集された『カフカス選集<sup>13</sup>』は、カフカス戦争に関わったロシア人軍人たちの回想録や当時の論文が全32巻にわたって数多く掲載されており、シャミーリとの戦争だけではなく、エルモロフ長官やパシュケヴィッチ長官とカフカス戦争の関係など、当時の北カフカスの状況を様々な角度から知ることができる。また

---

<sup>8</sup> *Мурзакевич Н.Н.* Очерк заслуг, следанных наукам светлейшим князем М.С.Воронцовым. Одесса, 1860., Письма Светлейшего Князя Михаила Семеновича Воронцова к профессору Одесского Ришельевского Лицея Н.Н. Мурзакевичу. (1842-1854). // Русский Архив. 1876. Кн.3. С. 362-373.

<sup>9</sup> *Авалиани С.Л.* Граф М.С.Воронцов.

<sup>10</sup> *Богданович М.* История войны 1814 года во Франции и низложение Наполеона по достоверным источникам. СПб., 1865.

<sup>11</sup> *Скальковский А.А.* Статическое введение в статическое описание Бессарабской области. СПб., 1846.

<sup>12</sup> *Додуков-Корсаков А.М.* Князь Михаил Семенович Воронцов. // Старина и новизна. 1902. Кн.5. С. 119-154., Мои воспоминания. Князя Дондукова-Корсакова. СПб., 1902., *Зиссерман А.Л.* Двадцать пять лет на Кавказе. СПб., 1879., *Вигель Ф.Ф.* Записки. Москва, 1891-1893., *Корф М.А.* Записки. Москва, 2003.

<sup>13</sup> *Кавказский Сборник.* 1876-1912. Кн.1-32.

R. A. ファデーエフ<sup>14</sup>が著した『カフカス戦争の60年<sup>15</sup>』は、1859年8月シャミーリ降伏後すぐに書かれたもので、カフカス戦争を理解するために、ポツヤドブローヴィンの著作<sup>16</sup>とともに同時代的な価値も高い二次史料である。R. A. ファデーエフはカフカス戦争を「本国ロシアの人びとに知らせること<sup>17</sup>」を目的として書いており、グルジア併合以後のオスマントルコやペルシアとの戦争、シャミーリを指導者としたミュリディズムの拡大、そしてM. S. ヴォロンツォフによる「新しい戦略」などを中心に詳述している<sup>18</sup>。これ以外では、イギリス人ジャーナリストであるジョン・バデレイが1908年に書いた『ロシアのカフカス征服<sup>19</sup>』が、カフカス戦争を体系的に紹介した世界初の英語文献として有名であり、その研究内容の正確さと深さは今日でもなお十分に価値のあるものと言って良い。

しかしながらロシア帝国時代の先行研究の大きな特徴として、カフカス戦争研究は単に戦争の個々の事実関係や戦略体系を明らかにすることだけが目的でなく、同時代的な要請としてカフカス戦争の歴史的な意味合いや性格を問うという義務も課せられた。つまりなぜロシアがカフカスに侵攻し、そしてなぜカフカス戦争が始まったのかという問いに対して、ロシア帝国としてその侵攻の正当性を歴史学の見地から構築する必要性が求められたのである<sup>20</sup>。

<sup>14</sup> 1850年から志願兵として北カフカスに赴任した。そして1856年からカフカス司令部に配属され、バリヤチンスキー全権総督に依頼されて『カフカス戦争の60年』を執筆した。

<sup>15</sup> *Фадеев Р.А. Шестьдесят Лет Кавказской Воины. Тифлис, 1860.*

<sup>16</sup> *Потто В. Кавказская Война в отдельных очерках, эпизодах, легендах и биографиях. СПб., 1885., Добровин Н. История войны и владычества русских на Кавказе. СПб., 1866.*

<sup>17</sup> *Фадеев Р.А. Указ.Соч. С. 1.*

<sup>18</sup> カフカス戦争での「新戦略」について、彼はバリヤチンスキーの軍功とともに高く評価している。*Там же. С. 35-36.*

<sup>19</sup> John F. Baddeley, *The Russian Conquest.* Russell & Russell, 1908.

<sup>20</sup> カフカス戦争やシャミーリに関するロシア・ソ連の歴史学論争について、以下の論文を参照。*Дегоев В.В. Проблема Кавказской войны XIX в. : историографические итоги. // Сборник Русского исторического общества. №2 (150) Москва, 2000. С. 225-250., Gammer, M. "Shamil in Soviet Historiography" in *Middle Eastern Studies.* Volume 28-4. 1992. pp 729-777.*

カフカス戦争への主な説明としては、①ロシアが自国の国益のためにカフカスに侵攻して、それに対抗したカフカス民族との間で武力衝突が生じたという相互排除性に基づいた歴史解釈、②文明国ロシアがカフカスに自分たちの恩恵を拡大する中で生じた戦争であったとする文明論的な歴史解釈、③ミュリディズムを狂信主義としながらも、シャミーリには政治指導者として一定の評価を与えて、いわば「革命民主主義」のごとくツァーリズムに対抗する社会解放運動・反植民地運動としてカフカス戦争を理解しようとした反独裁政治的な歴史観に基づく歴史解釈の三つが挙げられる。

第一の相互排除性に基づく歴史解釈は、感情的・精神的な視点が強調されただけであり、地政学的な理解には寄与したものの、カフカス戦争に対する歴史学的方法論を見出せなかったと言える。第二の文明論的な歴史解釈は、ロシア帝国がカフカスに侵攻したことを「文明」という観点から正当化できるとしたもので、帝国の公式見解として文明国ロシアの使命や責任を力説した。そしてシャミーリを「ロマン主義」の対象としながら、そのシャミーリに勝利したロシアの価値を強調したものである<sup>21</sup>。第三の反独裁政治史観はチェルヌイシェフスキー、ドブロリユーポフ、ゲルツェンに代表されるもので、彼らはロシア帝国によるカフカスでの政治的・社会的破壊に同情を示して、それに対抗したシャミーリによる武力闘争を「進歩」を目指した反植民地闘争として理想化し、肯定しようとした。彼らにとってカフカス戦争は革命民主主義的であって、進歩的かつ啓蒙的なものであったとされた<sup>22</sup>。

こうした、カフカス戦争を反植民地闘争とする歴史解釈は同時代のイギリスでも見ることができ、イギリスにとってアジアにおける最大のライバルであっ

---

<sup>21</sup> Дегоев В.В. Проблема Кавказской войны. С. 225-226. カフカスと「ロマン主義」「文明」に関しては、ここ十年間でサイド『オリエンタリズム』やサーヘニー『ロシアのオリエンタリズム』を通してロシア帝国論の一つの側面して広く知られることになったが、それらに対する数多くの反論や実証的な批判が繰り返されている。本論文ではカフカス戦争の歴史解釈の一つとして、文明論的存在を紹介するととどめる。サーヘニー「ロシアのオリエンタリズム」論に対する実証的批判として、木村崇「書評カルパナ・サーヘニー『ロシアのオリエンタリズム民族迫害の思想と歴史』袴田茂樹監修・松井秀和訳『ロシア語ロシア文学研究』（第33号、2001年）。

<sup>22</sup> Там же. С. 226.

たロシア帝国のカフカス進出は「ロシア嫌い Russophobia」という感情をイギリスの中に生み出す一因となった。そしてロシアの敵対者であるカフカス諸民族は「イギリスの味方」であり「アジアの防衛線」と考えられ、反植民地闘争として解釈されたのである。つまりここでは、カフカス戦争の歴史解釈は単に歴史研究の問題ではなく、ロシアのカフカスへの領土拡張に対する外交的非難であり、イギリスの否定的感情や外交利益をも体現していたと見られる<sup>23</sup>。

またマルクスやエンゲルスもカフカス戦争には興味を抱いており、エンゲルスは1857年1月『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』において、カフカス戦争をロシア帝国に反した北カフカス「山岳民による抵抗」として、ナポレオン軍に対抗したスペインのゲリラ戦やオーストリア・チロル地方の山岳戦との比較で分析した<sup>24</sup>。この歴史解釈はマルクスやエンゲルスに共通したと見られる反スラブ主義や反ロシア専制主義を理解することが重要であるが、ソ連時代には皮肉なことにこうした思想史的文脈が無視されることで、マルクス主義によってカフカス戦争が分析された事実だけが受け入れられた。

このようにロシア帝国時代は同時代の膨大な史料を駆使しながら、M.S. ヴォロンツォフの人物像や行政軍事キャリアについての研究が、史料の編纂と同時進行で進められた時代であったと言える。そして多くの史料や研究に共通する点として、M.S. ヴォロンツォフはロシア史における英雄として分析され、彼を肯定的に評価する歴史観がロシア帝国時代の先行研究の大半を占めていたことが指摘できる。

## 【第二節】ソ連時代の先行研究について

ソ連時代はマルクス主義歴史学の影響によって、革命以前の歴史研究の多くが史料分析にのみ依拠した「科学的でない」ものとして批判されるようになった。そしてソ連歴史学の関心は、個人を対象としたものよりも、下部構造である社会経済構造へと集中した。そのためM.S. ヴォロンツォフ研究はロシア帝国時代ほどに注目されることはなくなり、唯一インドバ氏によるヴォロンツォ

<sup>23</sup> Там же. С. 226.

<sup>24</sup> F.Engels, "Mountain Warfare in the Past and Present." In *New-York Daily Tribune*, January 27, 1857.

フ家と農奴問題に関する研究も、解放イデオロギーを主題としたマルクス主義歴史学によって包摂された<sup>25</sup>。

そしてソ連時代の19世紀カフカス研究は、その大半がイマーム・シャミーリとカフカス戦争についてのもので、彼の主導したミュリディズムが反植民地主義を掲げた「民族解放闘争」だったのか、それともロシア帝国の一体性を妨げた「反ロシア分子」だったのかという、いわゆるソ連歴史学のシャミーリ論争を生み出すことになった。もともと前述したように、ロシア帝国時代からカフカス戦争研究は存在しており、その学問的蓄積の上にマルクス主義歴史学が再解釈を行ったと考えるのが、より正確な理解であると言える。以下、簡単ではあるが、シャミーリ論争の概要を追って行く。

1920年代前半ポクロフスキーによって商業資本論を応用したカフカスの社会経済構造分析が進められたが<sup>26</sup>、1920年後半から階級史観がソ連歴史学に主流となると、以後カフカス戦争は「ツァーリズムの植民地への迫害に対する民族解放闘争であり、またロシア政府を支持したカフカス貴族に対する反封建的な抵抗運動<sup>27</sup>」として解釈されるようになった。そしてカフカスでの文化的・民族的な伝統的社会構造よりも、社会的搾取の有無を重視した階級史観によって歴史が構築されてゆき、研究の対象はカフカスでの社会経済構造となった。また1929年にミュリディズムに関する研究もなされたが、ソ連歴史学では無神論が前提とされていたため、あくまで政治イデオロギーとして理解され、イスラム教としての宗教性は否定された。

しかし1930年代に入ると、ポクロフスキー的な近代主義や商業資本論はソ連歴史学のなかで批判の対象となり、代わりに歴史における「英雄的個人の役割」が重視されるという、マルクス主義歴史学の転換が行われた。そしてこの歴史的な変化の中で、シャミーリはカフカス戦争の指導者として、カフカス民族をミュリディズムという政治イデオロギーによって反ロシア植民地主義へと導いた「民族解放闘争の英雄」であったと解釈されるようになった。これはカフカス戦争を階級闘争と結びつけた歴史解釈にも影響を与え、シャミーリを含め

<sup>25</sup> *Индова Е.И.* Вотчины и Крепостные крестьяне Воронцовых первой четверти XIX века. Москва, 1950.

<sup>26</sup> *Покровский М.Н.* Дипломатия и войны царской России в XIX столетии. Москва, 1923. С. 213.

<sup>27</sup> *Дегоев В.В.* Проблема Кавказской войн. С. 228.

たイマームやムスリム宗教指導者たちは「新たな支配階級」と考えられることで、カフカス戦争は「プロレタリアートの拡大とそれに反したロシア帝国主義」という科学的な手法によっても理解された。こうしてシャミーリはカフカスだけではなくソ連全土の「民族解放闘争の英雄」として、1930年代ソ連歴史学のなかで大きな評価を受けることになった<sup>28</sup>。

しかしながら、大祖国戦争前後を境目として、愛国主義の高揚やソ連多民族社会の精神的・政治的統一「諸民族の友好」がソ連全体の中で重要な位置を占めてゆくにつれて、ソ連歴史学は再び変化を見せた。そしてソ連歴史学の中でシャミーリの歴史解釈について新たな試みが行われ、それまで英雄視されていたシャミーリをロシアに敵対した政治指導者として、彼を「反ロシア分子」としてソ連歴史学の中で批判の対象とするものが生まれてきた<sup>29</sup>。

そして1947年の雑誌『歴史の諸問題』では、シャミーリはロシアに反抗した「政治的害悪」として糾弾され、カフカス戦争は「カフカスに文明と文化をもたらしたロシアへの反動」であって、シャミーリが当時オスマントルコやイギリスという、ロシアの敵国から支援を受けて反抗していたと批判的に解釈されるようになった<sup>30</sup>。この歴史解釈は1950年代初めに徐々に定着してゆき、カフカス戦争はミュリディズムの指導者シャミーリによって引き起こされた「オスマントルコとイギリスの植民地主義者たちの同胞<sup>31</sup>」によるロシアへの反乱であったと解釈されたのである。

しかしスターリン死後には、ファデーエフによってシャミーリを「反ロシア分子」としない歴史解釈も再び見られるようになり、ミュリディズムの社会経済構造などが改めて研究対象となった<sup>32</sup>。そしてスターリン批判を経た1956年にシャミーリ論争は新たな展開を見せ、ソ連歴史学においていわゆる「親シャー

<sup>28</sup> Дегоев В.В. Проблема Кавказской войн. С. 229.

<sup>29</sup> Там же. С. 234.

<sup>30</sup> Дискуссия о движении Шамиля. // Вопросы истории. 1947. №.11. С. 134-150.

<sup>31</sup> Шамиль-Ставленник Султанской Турции и Влитанской Колонизаторов. // Под. ред. Габричидзе М. М. Сборник документальных материалов. Тбилиси, 1953.

<sup>32</sup> Фадеев А.В. О внутренней социальной базе мюридистского движения на Кавказе в XIX веке. // Вопросы Истории. 1955. №6.

ミリ派」と「反シャミーリ派」という、二つの歴史解釈が生まれることになった。前者は階級史観に基づいて、シャミーリを民族解放闘争の英雄として肯定的に解釈し、後者はシャミーリを「反ロシア分子」として否定的に解釈しながら、両者ともそれぞれの歴史解釈の文脈から「進歩」の重要性を強調したのである。しかしながらこの論争は明確な見解の一致が見出せぬまま、1960年までに「自粛」されることになった<sup>33</sup>。

1960年代から1980年代までは、カフカス戦争それ自体ではなく、カフカス民族のロシアへの統一を「進歩」という観点から研究するのがソ連歴史学の主流となり、とりわけ「ロシア民族の偉大なる役割」について肯定的な言及がなされた。また1983年に北オセチア大学のプリーエフ教授が「カフカス戦争：社会的起源と存在<sup>34</sup>」という研究論文を発表したが、これは従来の階級史観や商業資本論ではなく、エンゲルスの家族社会論を応用してカフカス戦争を研究した新しい科学的アプローチであり、彼はカフカス戦争を「氏族社会から封建社会にいたる階級闘争<sup>35</sup>」であると歴史解釈した。

このように、ソ連時代はマルクス主義歴史学の絶対的影響を受けながら、シャミーリ論争を軸としてカフカス研究が進められたため、M.S. ヴォロンツォフ研究やカフカス統治研究への関心は弱かったと指摘できる。そして階級史観やいわゆる「親・反シャミーリ」といった二項対立的な歴史観は、ロシアとカフカスの関係を「相対するもの」と相関的に位置づける効果をもたらし、歴史研究の相互作用という今日の課題を大きく残す形となった。なおソ連時代の先行研究もまた膨大な史料や文献を用いた歴史分析であって、歴史解釈はマルクス主義歴史学やソ連共産党により構築されたが、帝国時代の先行研究と同様、現代のM.S. ヴォロンツォフ研究においても重要な研究業績である。

### 【第三節】現代の先行研究について

現代のM.S. ヴォロンツォフ研究は、本論文の冒頭で示したように、再び大きな盛り上がりを見せている。これはソ連崩壊後にマルクス主義歴史学が影響

<sup>33</sup> Дегоев В.В. Проблема Кавказской войны. С. 235.

<sup>34</sup> Блиев М.М. Кавказская Война : социальные истоки, сущности. // История СССР. 1983.

<sup>35</sup> Блиев М.М., Дегоев В.В. Кавказская Война. Москва, 1994. С. 146.

力を弱めたことで、帝国時代の歴史における個人の役割が重要視された歴史研究が復活しただけではなく、より重要な点として、ロシア連邦の難問であるチェチェン問題という要因が挙げられる。1990年代の二度のチェチェン紛争という政治的混乱や、2004年9月ベスラン学校人質事件、そして2006年3月現在、今なお混乱の続いているチェチェン情勢は、非常に残念な契機ではあるがカフカスに対する多くの人びとの関心を高めることになり、いわば同時代的な影響からもカフカス全権総督を務めたM.S.ヴォロンツォフに注目が集まったことは、認めざるを得ない。

現在のロシアでM.S.ヴォロンツォフ研究で著名なのは、V.A.ウドヴィック氏とO.Y.ザハロワ女史である。前者のV.A.ウドヴィック氏は、スタヴロポリ地方ヴォロンツォヴォ・アレクサンドロフスコエ村で生まれ、レニングラード国立大学文学部を卒業した。そして「自分の出身地」の歴史研究として、著書『ヴォロンツォフ<sup>36</sup>』を始めとした、M.S.ヴォロンツォフに関する数多くの研究論文を発表されている。彼はM.S.ヴォロンツォフの生涯を、ヴォロンツォフ家という名門貴族の家柄や、エルモロフを初めとした彼の豊富な知己に注目しながら、その人物像や政治姿勢を明らかにした。

同氏の大きな学術的功績は、新ロシア総督時代のプーシキンとの関係に、従来の見解とはまったく異なる歴史解釈を与えたことである。これまで両者の関係は、第一章冒頭で示したプーシキンのエピグラムで表現されたような、悪政官ヴォロンツォフという否定的イメージで理解されていたが、ウドヴィック氏とカツィック氏の共同研究によって、両者の一年間にわたる往復書簡が明らかにされたことで、M.S.ヴォロンツォフによる新ロシアでの文学奨励活動がプーシキンに肯定的な影響を与えていたことが歴史学的に実証された<sup>37</sup>。これはM.S.ヴォロンツォフ研究としての学術的な発見だけではなく、プーシキン学の再解釈を迫るものとしても大きな意義であると考えられる。

後者のO.Y.ザハロワ女史は、セバストポリにあるモスクワ国立大学黒海校の教授である。彼女は自身の修士論文において、M.S.ヴォロンツォフのパリ最高司令官時代の諸政策について研究をまとめており<sup>38</sup>、2001年には彼の生涯

<sup>36</sup> Удовик В.А. Воронцов. Москва, 2004.

<sup>37</sup> Удовик В.А., Кацик В.О. М.С.Воронцов и А.С.Пушкин. СПбГУП, 1997.

<sup>38</sup> Захарова О.Ю. М.С.Воронцов - Военный государственный деятель России первой половины XIX столетия. Дис... канд. ист. наук. Москва, 1997.

についての著書を完成させた<sup>39</sup>。彼女はとりわけ M.S. ヴォロンツォフのイギリスでのロシア愛国教育やヨーロッパ啓蒙主義への親和性に注目しながら、彼の人物研究を通して行政軍事キャリアを分析した。そして彼を取り巻いた人間関係について、新ロシア時代の「ヴォロンツォフ・スクール」の存在や、四十年近く親交の続いていたアルメニア正教会大司教（カトリコス）ネルセス 5 世との関係についても研究している<sup>40</sup>。

またモスクワ国立国際関係大学の V.V. デゴーフ教授は、カフカス戦争での M.S. ヴォロンツォフの「新戦略」を分析している。彼は同大学カフカス研究センターの所長でもあり、そして北オセチア大学のブリーエフ教授とともに『カフカス戦争<sup>41</sup>』を著し、また『イマーム・シャミーリ<sup>42</sup>』の著作でも知られている。彼は M.S. ヴォロンツォフの「新戦略」を、エルモロフの「包囲作戦」の応用として分析しながら、M.S. ヴォロンツォフに対して肯定的な評価を下しており、彼がカフカス戦争の終結に大きく寄与したことを明記している<sup>43</sup>。同氏はまた、カフカスをめぐるヨーロッパの対ロシア外交戦略についての研究者としても有名である<sup>44</sup>。

これ以外では、外国人研究者としてソ連時代から M.S. ヴォロンツォフ研究を進めた、カナダ聖トーマス大学 A.L.H. ラインランダー教授の学術業績も重要である。彼は自身の博士論文において<sup>45</sup>、ロシア帝国時代の先行研究を駆使しながら、19世紀前半から M.S. ヴォロンツォフ全権総督までの半世紀にわたるザカフカス統治を時系列で追ひ、その中でロシア帝国のザカフカス統治を「中央主義 centralism」「地方主義 regionalism」「自由主義 liberalism」と三つに分類した。彼の分類を私なりに解釈すると、「中央主義」はロシア官吏が公職を独占してロシア語教育やロシア文化をザカフカスに普及させる「ロシア化」を推進した中央集権的な統治、「地方主義」は現地のグルジア貴族に公職を配分してカ

---

<sup>39</sup> *Захарова О.Ю.* Генерал-Фельдмаршал.

<sup>40</sup> Там же. С. 352-356.

<sup>41</sup> *Блиев М.М., Дегоев В.В.* Кавказская Война.

<sup>42</sup> *Дегоев В.В.* Имам Шамиль.

<sup>43</sup> *Дегоев В.В.* Три силуэта. С. 156-204.

<sup>44</sup> *Дегоев В.В.* Кавказский Вопрос в международных отношениях 30-60 гг. XIX века. Владикавказ, 1992.

<sup>45</sup> Rhineland. *The Incorporation.*

フカスの伝統を尊重した地方分権的な統治、そして「自由主義」はロシア官吏が中心となって統治を行いながらも、ザカフカスの伝統を十分に保持しながら包摂してゆく統治であり、彼はその「自由主義」統治として M.S. ヴォロンツォフ全権総督による統治政策を高く評価した。同氏はまた1990年に、M.S. ヴォロンツォフに関する著書を発表して、彼の「自由主義」理念が行政軍事キャリアのなかに一貫して見出せるという解釈を歴史学的に示した<sup>46</sup>。これは M.S. ヴォロンツォフの統治政策や政治姿勢を通して、ロシア帝国史における「自由主義」統治という概念を新たに提示したという意味でも重要な意義を有しており、本研究における「新たな先駆者」と位置づけられる。

そしてラインランダー氏を含めて、これら四者に共通しているのは、M.S. ヴォロンツォフの政治姿勢と考える啓蒙主義（「自由主義」）を認めた上で、いずれも彼の行政軍事キャリアとその功績を高く評価している点である。これは彼らの先行研究の多くがロシア帝国時代と共通した一次史料を用いた手法であることにも起因するが、帝国時代の英雄史観は修正されているものの、彼を偉大な人物としてとらえる観点は共通している。

M.S. ヴォロンツォフ研究は、こうした個人的なアプローチ以外にも様々な手法で進められている。S.B. サモイロワ氏は自身の修士論文で、ナポレオン戦争での M.S. ヴォロンツォフのパリ最高司令官時代の活躍について研究を進めており<sup>47</sup>、彼のパリ占領軍の運営管理を知るためには重要な研究である。また学術団体ヴォロンツォフ協会<sup>48</sup>の発行している雑誌『ヴォロンツォフ家：ロシア史200年』には、M.S. ヴォロンツォフに関する論文が見られ、M.I. ミシェネフ「ヴォロンツォフの形而上哲学<sup>49</sup>」、D.Z. フェルドマン「M.S. ヴォロンツォ

<sup>46</sup> Rhinelander. *Prince Michael Vorontsov*.

<sup>47</sup> *Самойлова С.В. Граф М.С.Воронцов в общественно-политической жизни России первой половины XIX века. Диссертация канд. ист. наук. Москва 1995.*

<sup>48</sup> 1991年ウドヴィック氏を中心としてヴォロンツォフ家の研究を推進する学術団体として発足した。学術誌『ヴォロンツォフ：ロシア二百年史 *Воронцовы: Два века в истории России*』を、現在まで十冊発行。団体の運営するサイト「ヴォロンツォフ博物館」も有力な歴史的情報源として活用できる。  
(URL) <http://www.vorontsovmuseum.org.ru/>

<sup>49</sup> *Микешин М.И. Воронцовская Метафизика. // Воронцовы: Два века в истории России. Вып.1. 1991. С. 98-106.*

フとユダヤ人商人E.L. フェイギン<sup>50</sup>」などは優れた二次研究である。そして出版社「ズヴェズダ」編集長Y.A. ゴルディンが中心となって発行しているカフカス戦争に関する著作<sup>51</sup>や、学術誌『カフカス戦争』なども、現代のM.S. ヴォロンツォフ研究として貴重な二次文献である。

このほか外国研究者の先行研究として、カフカス戦争に関してはテルアビブ大学のM. ガマー教授の膨大な一次史料を用いた著書が優れているほか<sup>52</sup>、ロンドン大学で研究しているアンナ・ゼルキナ女史が、カフカス戦争やシャミーリとムスリムの関係を詳細に分析している<sup>53</sup>。またオールド・ドミニオン大学のA. ジェーシルド氏は、カフカス総督府の一次史料を用いながらM.S. ヴォロンツォフによるザカフカス統治も研究しており、いずれも英語の二次文献として重要なものである<sup>54</sup>。

## ＜おわりに＞ M.S. ヴォロンツォフ研究の展望

本論文は、私の博士論文での研究テーマである、カフカス全権総督およびカフカス軍最高司令官をつとめたM.S. ヴォロンツォフの統治政策について、その人物像に迫りながら彼の政治姿勢の理解に主眼を置いた。今後はザカフカス統治での教育政策や、カフカス戦争での「新戦略」をそれぞれ個別の研究テーマとしながら、それぞれ実証研究を進めてゆき、M.S. ヴォロンツォフによるカフカスでの「戦争と平和」を通して、ロシア帝国の「内と外」（クリステヴァ）を学術的に構築したい<sup>55</sup>。

現在、私はモスクワ国立大学歴史学部での在外研究を進めている。2005年度はちょうど大学創立250周年であり、こうした記念すべき年にロシアの大地を

---

<sup>50</sup> *Фельдман Д.З. Князь М.С.Воронцов и Еврейский Коммерсант Е.Л.Фейгин: 20 лет знакомства. // Воронцовы: Два века в истории России. Вып.4. 1999. С. 139-149.*

<sup>51</sup> *Гордин Я.А. Кавказ: Земля и Кровь. СПб., 2000.*

<sup>52</sup> *Gammer, M. Muslim Resistance.*

<sup>53</sup> *Zelkina, A. In Quest for God.*

<sup>54</sup> *Jersild, A. Orientalism and Empire.*

<sup>55</sup> ジュリア・クリステヴァ『外国人：我らの内なるもの』池田和子訳（法政大学出版、1990年）

踏みしめて研究できたことは、若手学者としての大きな誇りである。こうした機会に恵まれたことを心より感謝している。

### < M.S.ヴォロンツォフ年表 (1782-1856) >

#### ①生誕からパリ占領軍最高司令官の引退まで (1782-1821)

1782年 5月19日	サンクトペテルブルグで生まれる。
1783年	妹キャサリンが生まれる。
1784年	母親エカテリーナが肺結核のために急死。
1785年	父親S.R.ヴォロンツォフ駐英大使に任命される。
1785年	プレオブラジェンスキー親衛隊(砲兵伍長)任官。
1786年	家族とともに、イギリスでの生活を始める。
1789年	フランス革命をロンドンで経験する。
1798年	パーヴェル1世宮廷侍従を任官するが、辞退。
1800年	侍従位を剥奪される。
1801年 3月	三月クーデター。パーヴェル1世の暗殺。
1801年 5月	ペテルブルグに戻る。
1801年 9月15日	アレクサンドル1世 戴冠式。
1801年10月 2日	プレオブラジェンスキー連隊の陸軍中尉となる。
1803年 9月	ツイツィアノフ長官のカフカス部隊に配属される。
1804年 4月	ガンジャ要塞の攻略。大尉に昇進。
1805年	オセチアでの会戦の最中に、発熱のためモスクワに戻る。
1810年	少将に昇進。黒海西岸でオスマン・トルコ戦争。
1808年 1月25日	妹キャサリンがジョージ・ハーバードと結婚。
1812年 8月	ボロディノ会戦。セミョーノフ突角堡での防衛。負傷。
1813年	ライプチヒ「諸国民の戦い」に参戦する。
1814年 2月23日	クラオンヌの会戦で大戦果を収める。
1815年	パリ会戦に参加。パリ到着。
1815年	パリ占領軍ロシア最高司令官に就任(任期1815-1819)。
1815年	『第12師団下級歩兵部隊の対処規則』

- 『第12師団 M.S. ヴォロンツォフ将校教令』制定。  
1818年10月12日 聖ウラジーミル勲章（第一位）。  
1819年 4月20日 パリにて妻エリザベータとの結婚式。  
1820年 5月 農奴解放を唱える合法的協会を創設する試み。

②新ロシア総督時代（1823-1844）

- 1823年 5月 7日 新ロシア総督およびベッサラビア総督に就任。  
1823年10月23日 長男セミョーノフ誕生。  
1824年 アルプカ宮殿の建設開始。  
1824年 プーシキン滞在と「追放」処分。  
1825年 4月 3日 次女ソフィア誕生。  
1825年 イズマイルでの腺ペスト。  
1825年10月11日 アレクサンドル1世のオデッサ訪問。  
1825年11月 アレクサンドル1世の逝去。  
1825年12月14日 デカブリストの乱。  
1826年 5月25日 国家評議会のメンバーに任命される。  
1826年12月 ペテルブルグ科学アカデミー名誉会員となる。  
1829年 9月29日 バルナ要塞の陥落。  
1830年 コレラの発生。オデッサ・セバストポリの隔離。  
1832年 6月 父親 S.R. ヴォロンツォフ死去（享年88歳）。  
1833年 オデッサ＝コンスタチノーブル間の連絡船事業開始。  
1836年 元老院議員に任命される。  
1837年 ニコライ1世夫妻のオデッサ訪問。  
1837年10月 オデッサでの腺ペスト蔓延。  
1844年11月17日 ニコライ1世からカフカス全権の委託を依頼される。  
1844年12月27日 カフカス全権総督に就任する。

③カフカス全権総督時代（1845-1855）

- 1845年 3月24日 チフリス到着。  
1845年 ダルゴ大会戦。家督「公 Князь」を襲名する。

1845年	新しい県制度を導入。ゲルジア貴族の権利保証。
1847年 9 月	サルト要塞の攻略。
1848年 7 月	ゲルゲブリ要塞の攻略。
1848年	カフカス「教育管区規定」成立。
1851年	最高公爵 светлейший князь を襲名する。
1853年	クリミア戦争の開始。
1854年	健康上の理由により、全権総督からの引退。
1855年 3 月	ニコライ 1 世 逝去。
1856年 8 月	陸軍元帥に就任する。
1856年11月 6 日	M.S.ヴォロンツォフ逝去（享年74歳）。

**【付録：（ヴォロンツォフ）讃歌 Песня】**

Кто борец с Наполеономъ,      ナポレオンと戦ったのは誰か。  
 Побороль грозу бойцовъ      戦争の恐怖に打ち勝った、  
 Въ славной битве под Краоном ?      クラオンの戦いの英雄は誰か ?  
 Ратный вождь наш Воронцов !      戦争司令官、我らがヴォロンツォフ !

Кто Царю сподвижник нужной      ツァーリへの英雄的偉業をなしたのは誰か。  
 Вождь-правитель городов.      街々の司令官であって為政者。  
 Устроитель Руси южной ?      南ロシアの創始者は誰か ?  
 Наш вельмож Воронцов.      我らが貴人、ヴォロンツォフ。

Кто избранник, вождь маститой,      傑士たるベテラン司令官。  
 На кавказе от врагов.      カフカスで、敵から  
 Сталь отечества защитой ?      祖国の防衛を成し遂げた。  
 Руси честь- наш Воронцов !      ロシアの我らが栄光、ヴォロンツォフ !

В. Филимонов (出典：АКВ. Кн. 36. С. 507) 【拙訳：V. フィリモノフ「讃歌」】

**New Perspectives and Future Outlook on the Study  
on M.S.Vorontsov  
— His Caucasian Administration  
in the Russian Empire (1845-1854) —**

Tomoyuki HANADA

In this paper, I will analyze the biography of Michael Seman Vorontsov (1782-1856 : in Russian, **Михаил Семенович Воронцов**), who was the “governor-general (**наместник**)” of the Caucasus and a commander-in-chief of the Caucasian forces with absolute authority<sup>56</sup>, from 1845 until 1854. By examining his military and civilian carriers as a famous and rich aristocrat of the Russian Empire, I account for his political character which was influenced by European Enlightenment, Russian patriotism and his original networks between Europe and Russia. With this backdrop, it must be taken into consideration that Vorontov was also greatly influenced by European cultures and liberal ideas, which he was educated in and he worked in Europe as a secretary for his father, S.R.Vorontsov, an ambassador to England during his youth.

My doctoral dissertation is mainly concerned with his Caucasian administration and its political, economical and cultural integrations to the Russian Empire, including the strategy of Caucasian war against Imam Shamil and Muridism. Through this paper, I will point out that M.S.Vorontsov himself took a great role in this administration as an elder leader with an absolute authority and established a stable Caucasian political foundation in the territory of Russian Empire (Trans-Caucasus and North Caucasus). At the same time, by depicting the historiography of the study of M.S.Vorontsov, I will illustrate some characteristics and variants of historical significance of this study in the eras of the Russian

---

<sup>56</sup> АКВ. Кн.40. Москва 1895. С.499.

Empire, USSR, and the present.

In Japan, M.S.Vorontsov is not as well known as his name and achievements deserve. It is my intention to introduce this Russian hero and his extraordinary life to others, and by doing so, contributing to the developments of study in Russian history. In particular, by focusing on his Caucasian administration, and his military and civilian carriers and political character, it is my intention to make clear the academic significance of this theme and to suggest new perspectives and the future outlook on the study of M.S.Vorontsov.